

## 巻頭言

## 「社会と情報」

横井 利彰



3月11日の東北関東大震災で被災された方々に心よりお見舞い申し上げます。亡くなられた方々の無念さを思うとき、言葉では表せない心の痛みを感じます。地震と津波の直後と避難後も情報伝達が充分働かない状況があり、情報サービス技術の頑健性について、今後真摯に精査と猛省が必要であり、一翼を担えるよう努めたいと考えます。

情報メディアセンター・ジャーナルは、本号で12年目を迎えた。1997年の環境情報学部新設と同時に情報メディアセンターが設置され、その3年後の2000年に創刊して以来、常に先進的な、情報、メディア、コミュニケーションに関する研究及びこれらの分野の教育方法、そして実践的な地域連携活動の成果を共有する場として、独自の役割を担ってきている。昨今の社会における情報メディアの様態を見ると、今年生誕100年にあたるカナダの英文学者・文明批評家のマクルーハンがかつて述べた、「コンピュータによって人間の中枢神経組織までが拡大・強化される」という主張を思い出さずにはいられない。彼はまた「メディアはメッセージである」という有名な言葉で、コンテンツの影響力より敢えてメディア自体の影響力への意識の大切さを強調した。最近成長著しいSNS（ソーシャル・ネットワーキング・サービス）は、参加度が高いメディアとして全世界にコミュニティを構築しているが、そのサービス構造自体が作る制約についての注視は今後も必要であろう。World Wide Webの生みの親であるティム・バーナーズ＝リーの最近の論考でも、インターネット上のサービスを巡り、平等の原則が危機にさらされていると訴えている。今後益々、情報技術と人間の関わりは多様化と深化が同時に進むが、その突先を見極めるためにも、このジャーナルは大切なものでありつづけるものと考えている。

さて本号においても、社会科学系から情報技術系にわたり社会の趨勢をとらえた興趣の論文を多数寄稿頂いた。環境情報学部の学問領域の特色を生かした境界領域の研究や教育、横浜キャンパス周辺地域との交流・貢献の成果報告などの内容は、他分野の研究者・教育者の方への新しい刺激で溢れているのではないかと思う。また本号では、初めての試みとして「解説小特集」を組み2件の寄稿を頂いた。多くの方に関係する解説テーマとして「情報の長期保存の課題と技術」を選んだ。情報社会の発展により、人類の叡智の集約である図書情報や公文書、業務用の保存文書、さらには家族のデジカメ写真に至るまで、大量のデジタル・データの保存と利用が不可欠になっている。しかし、大切な情報を将来利用可能な形で長期にわたって保存することは実は容易ではない。ハードディスクやフラッシュメモリーの寿命は数年～10年程度と云われているし、大容量の光ディスクの寿命は製品の種類と品質により大きく異なる。そこで解説小特集では、まず本学図書館長の青山貞一教授から、公文書や図書情報などの長期記録に関する社会の要請、最新の半導体関連技術、将来ビジョンとしての図書館に至るまで、広汎かつ精細な解説をご執筆頂いた。続いて、デジタル・データの長期保存に適する「光ディスク技術」の現状と課題について、特定非営利活動法人アーカイヴディスクテストセンター（ADTC）の井橋孝夫理事長に解説頂いた。読者の方の大切な情報の記録に役立てて頂けるのではないかと思う。

本号にはさらなる内容が盛り込まれている。井橋理事長にお口添え頂くことで、CD21ソリューションズの中島平太郎会長にエッセイをご寄稿頂くことができた。CDの生みの親としてご存じの方も多と思われるが、御年90歳になられてなお、「心地よい音」を求めて真理を追究されている。今回はCDRに寄せる想いを軸に語って頂いた。新たな道を切り開く姿勢は、きっと読者の方々により刺激を与えて下さるものと信じている。

本年4月からは全学の情報系センターの再編が行われ、そのなかで各キャンパスの特色の維持・発展を尊重しつつ、大学全体での情報系組織の連携が強化される。情報系の先鋭化は、結果として電子化の進む図書館との連携の必要性を鮮明にすることになるのではないかと思う。また実は、紙でできた書籍の重要性も改めて認識する機会になるのではないかと、私個人は感じている。以上が本号の概略となる。早速、本ジャーナルを手にとって頂いたそのままに、五感で内容を感じ取って頂きたいと願っている。

YOKOI Toshiaki

東京都市大学環境情報学部情報メディア学科教授・情報メディアセンター所長